

エッセイスト 近藤 節夫



Photo by Neil Palmer, 2011. Aerial view of the Amazon rainforest, near Manaus, the capital of the Brazilian state of Amazonas. ブラジルのアマゾナス州の州都マナウス近くのアマゾン熱帯雨林の空撮

南米大陸を東西に流れるアマゾン川は、アフリカのナイル川に次いで世界で2番目に長い大河である。しかし、それは単に長さだけの比較で、あまり蛇行しないナイルに比べて蛇行を繰り返すアマゾンは、流域面積がナイル川の2倍もあり、豊富な流量は100倍も多い。それ故世界最大の河川と言われている。

しかし、その広いアマゾン全域が世界自然遺産と認定されたわけではなく、対象となったのは、「中央アマゾン保全地域群」と言われる密林地帯である。アマゾンには、独特の魅力と言おうか魔力がある。地球上の酸素の1/4は、この緑っぱいのジャングルが供給しているとブラジルっ子は得意げに話す。また、全長6,400kmの長さを誇りながら、大都市には流入しないために橋はひとつも架けられていない。アマゾンの奥深さと魅力はとて一口には語れない。樹木が覆いかぶさるようなジャングルには、外部とほとんど接触せず、自給自足の生活を営んでいる少数民族もいる。自然界の動物や植物も数多く生息し、100万種以上の昆虫類をはじめ、哺乳類、鳥類、魚類など多くの野生動物が生き抜いている。



マナウス近くのアマゾン沿岸の高床式住宅

そのアマゾンの玄関口マナウスは、大西洋に臨むアマゾン河口から1,500kmほど遡った港町で、今ではアマゾン観光の中心都市である。19世紀末から20世紀初頭にかけてヨーロッパ人がゴム林に目を付けゴム景気を招き、市街もヨーロッパ化され、中心部にある重厚なオペラハウスは今でも本場の劇場に引けを取らない。その後一時ゴム景気が下火となり、1960年代には人口は大きく減少したが、政府による森林、鉱業、農業開発により再び経済が甦り、今や2

百万人を超えるまでに回復し、ブラジルでは7番目の大都市となった。雨季と乾季の雨量の差が激しく川面が16mも上下し、港には浮き桟橋が設置され沿岸の家屋も高床式である。マナウスでは川幅は7km程度にしか過ぎないが、河口では実に300km超に広がり、対岸は霞んでほとんど視界に入らない。

このマナウスから船に乗ってアマゾン川の支流であるネグロ川を10分ほど下るとネグロ川とソリモンエス川の合流地点に出る。不思議なことにここか



混じり合わない二つの川の色

らしばらくネグロ川の黒い水と白いソリモンエス川の水はいつまでも混じり合わずに、アマゾン本流へ向けて流れていく。水温、水流、含有物など水質の違いで中々混じり合わず、延々10kmに亘ってアマゾン川は黒い水と白い水が同じ川の中で左岸と右岸に分かれて流れている。

アマゾン川で日本人にとって一番興味を抱かせる生き物は、人喰い魚と言われる「ピラニア」であろう。体形は15cmほどであるが、中には60cmの大物もいる。外形は鋭利な歯と強靱な顎を持つ肉食性の魚である。ピラニアは人間の生血を見ると噛みつき、手足に傷口を持ったままピラニアに近寄ることは危険だが、出血さえしていなければ喰いつかれる心配はない。

そのピラニアを釣ってみようと、ある時地元の人に誘われマナウスから少々下ったジャングルで糸を垂らしたところ予想外に多くのピラニアが獲れた。そこでしばらく水浴を楽しんだ後に焼き上げて食べたところ、ピラニアはイメージこそ怖いけど味は中々イケるものだった。夜には地元民にそそのかされ野生のワニの捕獲に繰り出した。ボートの上で彼らが格闘の末暴れるワニの子どもを1匹生け捕った。夜空を見上げるとまばゆいばかりの南十字星が輝いて見えた。

ピラニアを釣ったぞ!



その日釣り上げたピラニア

地元民からアマゾンの自然流域に入ったら行動しなければアマゾンを知ったことにはならないと言われた通り、アマゾンは原始自然の魅力に富んでいる。確かに遠くから見ているだけでは本当のアマゾンは分からない。行動してこそスケールの大きいアマゾンを知り、その魅力に憑りつかれるのだ。それこそがアマゾンの魔力だろうか。